

〔原著〕 松本歯学 16 : 58-67, 1990

key words : 冠 - 経年的装着頻度 - 統計

昭和63年における冠・架工義歯に関する統計的観察
その1 単独冠について

小林賢一, 清水くるみ, 岩井啓三, 岩崎精彦, 片岡 滋
高橋喜博, 森岡芳樹, 梅尾正弘, 甘利光治

松本歯科大学 歯科補綴学第2講座 (主任 甘利光治 教授)

中根 卓

松本歯科大学 口腔衛生学教室 (主任 近藤 武 教授)

Statistical Observations of Crowns and Bridges made in 1988
Part 1 Single crowns

KENICHI KOBAYASHI, KURUMI SIMIZU, KEIZO IWAI
KIYOHICO IWASAKI, SIGERU KATAOKA, YOSHIHIRO TAKAHASHI,
YOSHIKI MORIOKA, MASAHIRO TOGANOO and MITSU HARU AMARI

Department of Prosthodontics II, Matsumoto Dental College
(Chief : Prof. M. Amari)

SUGURU NAKANE

Department of Community Dentistry, Matsumoto Dental College
(Chief : Prof. T. Kondo)

Summary

A study was made of 725 crowns which had been fabricated for patients at the Prosthodontic Clinic of Matsumoto Dental College during 1988.

Some of results are as follows ;

- 1) 47.8 % of the patients were males and 52.2 % were females.
- 2) 93.5 % of the patients were between 20 and 69 years old.
- 3) Crowns of the upper abutment teeth were more numerous than for the lower abutment teeth.
- 4) 72.6 % of the crowns were fabricated for nonvital teeth.
- 5) 48.4 % of the crowns were fabricated as full cast crowns, 18.2 % as facing crowns (14.5 % as porcelain fused to metal crowns, 3.7 % as resin facing crowns), 10.1 % as jacket

crowns (9.8% as resin jacket crowns and 0.3% as porcelain jacket crowns), 23.0% as partial coverage crowns and 0.3% as dowel crowns.

結 言

各種補綴物の統計的調査によって、補綴学の推移、材料や技術の進歩、および社会情勢や地域性などが推測でき、さらには将来の展望に対し、多くの示唆が得られる。

こうしたことから、私達の講座でも、松本歯科大学病院補綴診療科における冠・架工義歯補綴物について、昭和47年から一連の経年的調査を行ない、報告¹⁻⁸⁾してきた。

そこで今回は、昭和63年1月から同年12月までの1年間について、松本歯科大学病院補綴診療科で作製、装着された単独冠を中心に調査し、併せて昭和62年の調査報告⁸⁾と比較、検討したので報告する。

調査方法と項目

松本歯科大学病院、補綴診療科における昭和63年1月から同年12月までの1年間の外来患者410名および作製、装着された単独冠725個について、病院歯科診療録、補綴科プロトコル、材料センター材料支給伝票等を資料とし、マイクロコンピュータ・Macintosh plus (Apple社製)を用いて、収集データを分類集計後、以下の各項目について調査した。

A. 患者総数と地域別患者数

単独冠および架工義歯を装着した患者の住所を塩尻市内、これを除く長野県内および長野県外とに区別し、その数を調査した。

B. 性別および年齢階級別患者数

患者の年齢を20歳未満、20歳代、30歳代、40歳代、50歳代、60歳代、70歳代および80歳以上の8階級に分け調査した。

C. 単独冠および架工義歯の装着数

装着物を単独冠および架工義歯に分け、その総数を調べた。

D. 単独冠について

1. 年齢階級別装着頻度

患者の年齢を前記B項に準じて区分し、各年齢階級別の装着頻度を調べた。

2. 性別装着頻度

3. 部位別装着頻度

装着部位を上、下顎および前歯部、小臼歯部、大臼歯部の各歯群に分け調査するとともに、年齢階級別装着頻度との関係を調査した。

4. 支台歯の生・失活歯別装着頻度

支台歯を生・失活歯別に分類して装着頻度を調査するとともに、年齢階級別および部位別装着頻度との関係を調査した。

5. 種類別装着頻度

支台装置の種類を全部鋳造冠、一部被覆冠、前装冠(既製陶歯前装冠、陶材溶着鋳造冠、レジン前装冠の3種)、ジャケット冠(陶材およびレジンジャケット冠の2種)およびアタッチドタイプボストクラウン(以下継続歯と略す)に分類して、それらの装着頻度を調査するとともに、年齢階級別、性別および部位別装着頻度との関係を調べた。

6. 支台築造体について

支台築造体をキャストコア、レジンコア、アマルガムコア、セメントコアに分類して、その築造頻度を調べると同時に、築造部位および単独冠の種類別築造頻度との関係を調査した。

調査成績

A. 患者総数と地域別患者数

表1に示すように、単独冠および架工義歯を装着した患者総数は410名であった。その構成について地域別に見ると、塩尻市内を除く長野県内の患者が245名(59.8%)で過半数を占め、次いで塩尻市内在住者が152名(37.1%)で、長野県外在住者

表1: 地域別患者数

地 域	患 者 数	
	昭和63年	昭和62年
塩 尻 市 内	152 (37.1)	193 (40.0)
長 野 県 内 (除・塩尻市内)	245 (59.8)	271 (56.1)
長 野 県 外	13 (3.2)	19 (3.9)
計	410 (100.0)	483 (100.0)

()%

表2：性別および年齢階級別患者数

性	年齢階級 調査年	20歳未満	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳以上	計
		男	昭63 6 (1.5)	29 (7.1)	45 (11.0)	41 (10.0)	39 (9.5)	31 (7.6)	5 (1.2)	
	昭62	5 (1.0)	53 (11.0)	46 (9.5)	34 (7.0)	44 (9.1)	24 (5.0)	5 (1.0)	211 (43.7)	
女	昭63	14 (3.4)	43 (10.5)	37 (9.0)	47 (11.5)	41 (10.0)	30 (7.3)	2 (0.5)	214 (52.2)	
	昭62	9 (1.9)	69 (14.3)	58 (12.0)	60 (12.4)	57 (11.8)	17 (3.5)	1 (0.2)	272 (56.3)	
計	昭63	20 (4.9)	72 (17.6)	82 (20.0)	88 (21.5)	80 (19.5)	61 (14.9)	7 (1.7)	410 (100.0)	
	昭62	14 (2.9)	122 (25.3)	104 (21.5)	94 (19.5)	101 (20.9)	41 (8.5)	6 (1.2)	483 (100.0)	

() %
昭63：昭和63年
昭62：昭和62年

表3：単独冠の年齢階級別および部位別装着数

年代	調査年	部位								
		3+3	54/45	8-6 6-8	8+8	3+3	54/45	8-6 6-8	8+8	8+8 8+8
20歳未満	昭63	4 (0.6)		8 (1.1)	12 (1.7)			12 (1.7)	12 (1.7)	24 (3.3)
	昭62	9 (0.8)	3 (0.3)	4 (0.4)	16 (1.7)		2 (0.2)	4 (0.4)	6 (0.6)	22 (2.3)
20歳代	昭63	13 (1.8)	17 (2.3)	37 (5.1)	67 (9.2)		8 (1.1)	37 (5.1)	45 (6.2)	112 (15.4)
	昭62	57 (6.0)	43 (4.6)	58 (6.1)	158 (16.7)	8 (0.8)	15 (1.6)	55 (5.8)	78 (8.3)	236 (25.0)
30歳代	昭63	41 (5.7)	29 (4.0)	41 (5.7)	111 (15.3)	6 (0.8)	19 (2.6)	36 (5.0)	61 (8.4)	172 (23.7)
	昭62	51 (5.4)	53 (5.6)	47 (5.0)	151 (16.0)	7 (0.7)	25 (2.6)	42 (4.4)	74 (7.8)	225 (23.8)
40歳代	昭63	28 (3.9)	20 (2.8)	28 (3.9)	76 (10.5)	2 (0.3)	23 (3.2)	44 (6.1)	69 (9.5)	145 (20.0)
	昭62	46 (4.9)	29 (3.1)	25 (2.6)	100 (10.6)	2 (0.2)	21 (2.2)	39 (4.1)	62 (6.6)	162 (17.1)
50歳代	昭63	39 (5.4)	20 (2.8)	24 (3.3)	83 (11.4)	9 (1.2)	29 (4.0)	18 (2.5)	56 (7.7)	139 (19.2)
	昭62	40 (4.2)	26 (2.8)	36 (3.8)	102 (10.8)	33 (3.5)	40 (4.2)	31 (3.3)	104 (11.0)	206 (21.8)
60歳代	昭63	28 (3.9)	10 (1.4)	22 (3.0)	60 (8.3)	17 (2.3)	26 (3.6)	17 (2.3)	60 (8.3)	120 (16.6)
	昭62	15 (1.6)	9 (0.8)	13 (1.4)	37 (3.9)	15 (1.6)	19 (2.0)	8 (0.9)	42 (4.4)	79 (8.4)
70歳代	昭63	5 (0.7)	1 (0.1)	1 (0.1)	7 (1.0)		2 (0.3)	4 (0.6)	6 (0.8)	13 (1.8)
	昭62	6 (0.6)	2 (0.2)	4 (0.4)	12 (1.3)			1 (0.1)	1 (0.1)	13 (1.4)
80歳以上	昭63			2	2					2
	昭62			(0.2)	(0.2)					(0.2)
計	昭63	158 (21.8)	97 (13.4)	161 (22.2)	416 (57.4)	34 (4.7)	107 (14.8)	168 (23.2)	309 (42.6)	725 (100.0)
	昭62	224 (23.7)	165 (17.5)	189 (20.0)	578 (61.2)	65 (6.9)	122 (12.9)	180 (19.1)	367 (38.8)	945 (100.0)

() %
昭63：昭和63年
昭62：昭和62年

は13名(3.2%)であった。

B. 性別および年齢階級別患者数

表2に示すように、性別では、男性が196名(47.8%)、女性が214名(52.2%)と、女性が過半数を占めていた。また、年齢別では20歳代から60歳代までで全体の93.5%を占めていた。

C. 単独冠および架工義歯の装着数

昭和63年1ヶ年間における単独冠の装着数は725個、架工義歯は207装置であった。

D. 単独冠について

1. 年齢階級別装着頻度

表3に示すように、最も多かったのは30歳代(172個, 23.7%)で、40歳代(145個, 20.0%)、50歳代(139個, 19.2%)と続き、20歳代から60歳

代までで全体の94.9%を占めていた。

2. 性別装着頻度

表7に示すように、女性に装着された単独冠は395個(54.5%)と過半数を占めていた。

3. 部位別装着頻度

表3に示すように、顎別では上顎(416個, 57.4%)が下顎(309個, 42.6%)を上回っていた。

歯群別にみると、上顎では大白歯部(161個, 22.2%)、前歯部(158個, 21.8%)、小白歯部(97個, 13.4%)、下顎では大白歯部(168個, 23.2%)、小白歯部(107個, 14.8%)、前歯部(34個, 4.7%)の順で、最も装着頻度の高かったのは、下顎大白歯部で、最も低かったのは下顎前歯部であった。

また、年齢階級別との関係において、顎別では、

表4：単独冠支台歯の生・失活歯別および年齢階級別装着数

支台歯の状態	年齢階級 調査年	20歳未満	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳以上	計	
		生活歯	昭63 (2.8) (8.0) (5.9) (4.7) (3.3) (2.8)	20	58	43	34	24	20		
失活歯	昭62	(1.3) (9.5) (7.4) (4.0) (4.8) (0.8) (0.1) (0.1)	12	90	70	38	45	8	1	1	265 (28.0)
	昭63	(0.6) (7.4) (17.8) (15.3) (15.9) (13.4) (1.8)	4	54	129	111	115	100	13		526 (72.6)
計	昭62	(1.1) (15.4) (16.4) (13.1) (17.0) (7.5) (1.3) (0.1)	10	146	155	124	161	71	12	1	680 (72.0)
	昭63	(3.3) (15.4) (23.7) (20.0) (19.2) (16.6) (1.8)	24	112	172	145	139	120	13		725 (100.0)
計	昭62	(2.3) (25.0) (23.8) (17.1) (21.8) (8.4) (1.4) (0.2)	22	236	225	162	206	79	13	2	945 (100.0)

()%

昭63：昭和63年

昭62：昭和62年

表5：単独冠支台歯の生・失活歯別および部位別装着数

支台歯の状態	部位 調査年	3+3	54 45	8-6 6-8	8+8	3+3	54 45	8-6 6-8	8+8	8+8	
		生活歯	昭63 (1.9) (3.4) (9.0) (14.3) (1.7) (2.6) (8.8) (13.1) (27.4)	14	25	65	104	12	19	64	95
失活歯	昭62	(2.0) (6.6) (7.8) (16.4) (1.2) (3.8) (6.7) (11.6) (28.0)	19	62	74	155	11	36	63	110	265 (28.0)
	昭63	(19.9) (9.9) (13.2) (43.0) (3.0) (12.1) (14.3) (29.5) (72.6)	144	72	96	312	22	88	104	214	526 (72.6)
計	昭62	(21.7) (10.9) (12.2) (44.8) (5.7) (9.1) (12.4) (27.2) (72.0)	205	103	115	423	54	86	117	257	680 (72.0)
	昭63	(21.8) (13.4) (22.2) (57.4) (4.7) (14.8) (23.2) (42.6) (100.0)	158	97	161	416	34	107	168	309	725 (100.0)
計	昭62	(23.7) (17.5) (20.0) (61.2) (6.9) (12.9) (19.0) (38.8) (100.0)	224	165	189	578	65	122	180	367	945 (100.0)

()%

昭63：昭和63年

昭62：昭和62年

すべての年代において上顎と下顎が同じか、または上顎が上回っていた。

4. 支台歯の生・失活歯別装着頻度

表4, 5は単独冠支台歯の生・失活歯別装着頻度と年齢階級別および部位別との関係を表したものである。

全体では、失活歯が526個(72.6%)、生活歯が199個(27.4%)であった。

年齢別階級との関係では、20歳代以下を除く全

ての年代で、失活歯が生活歯を上回っており、また、部位別でも、全ての部位において失活歯が生活歯を上回っていた。

5. 種類別装着頻度

表6, 表7, 表8は、支台装置の種類別装着頻度と年齢階級別、性別および部位別頻度との関係で表したものである。

全体では全部鑄造冠が351個(48.4%)でもっとも多く、次いで一部被覆冠167個(23.0%)、前装

表6：単独冠の種類別および年齢階級別装着数

種類	年齢階級 調査年	20歳未満	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳以上	計
		()%								
全部鑄造冠	昭63	2 (0.3)	34 (4.7)	86 (11.9)	81 (11.2)	75 (10.3)	65 (9.0)	8 (1.1)		351 (48.4)
	昭62	3 (0.3)	73 (7.7)	103 (10.9)	93 (9.8)	109 (11.5)	37 (3.9)	7 (0.7)	2 (0.2)	427 (45.2)
前装冠	昭63	3 (0.4)	14 (1.9)	40 (5.5)	22 (3.0)	31 (4.3)	19 (2.6)	3 (0.4)		132 (18.2)
	昭62	7 (1.0)	63 (6.7)	50 (5.3)	41 (4.3)	27 (2.9)	14 (1.5)	2 (0.2)		204 (21.6)
既製陶歯前装冠	昭63									
	昭62									
レジ前装冠	昭63	2 (0.3)		8 (1.1)	4 (0.6)	6 (0.8)	7 (1.0)			27 (3.7)
	昭62			4 (0.4)	2 (0.2)	6 (0.6)				12 (1.3)
陶材溶着鑄造冠	昭63	1 (0.1)	14 (1.9)	32 (4.4)	18 (2.5)	25 (3.4)	12 (1.7)	3 (0.4)		105 (14.5)
	昭62	7 (1.0)	63 (6.7)	46 (4.9)	39 (4.1)	21 (2.2)	14 (1.5)	2 (0.2)		192 (20.3)
ジャケット冠	昭63	1 (0.1)	6 (0.8)	13 (1.8)	10 (1.4)	17 (2.3)	24 (3.3)	2 (0.3)		73 (10.1)
	昭62	3 (0.3)	21 (2.2)	17 (1.8)	6 (0.6)	38 (4.0)	13 (1.4)	4 (0.4)		89 (10.8)
レジジャケット冠	昭63	1 (0.1)	6 (0.8)	13 (1.8)	8 (1.1)	17 (2.3)	24 (3.3)	2 (0.3)		71 (9.8)
	昭62	1 (0.1)	15 (1.6)	17 (1.8)	6 (0.6)	34 (3.6)	12 (1.3)	4 (0.4)		89 (9.4)
ポーセレンジャケット冠	昭63				2 (0.3)					2 (0.3)
	昭62	2 (0.2)	6 (0.6)			4 (0.4)	1 (0.1)			13 (1.4)
継続歯	昭63				2 (0.3)					2 (0.3)
	昭62		4 (0.4)	2 (0.2)						6 (0.6)
一部被覆冠	昭63	18 (2.5)	58 (8.0)	33 (4.6)	30 (4.1)	16 (2.2)	12 (1.7)			167 (23.0)
	昭62	9 (1.0)	75 (7.9)	53 (5.6)	22 (2.3)	32 (3.4)	15 (1.6)			206 (21.8)
計	昭63	24 (3.3)	112 (15.4)	172 (23.7)	145 (20.0)	139 (19.2)	120 (16.6)	13 (1.8)		725 (100.0)
	昭62	22 (2.3)	236 (25.0)	225 (23.8)	162 (17.1)	206 (21.8)	79 (8.4)	13 (1.4)	2 (0.2)	945 (100.0)

()%

昭63：昭和63年

昭62：昭和62年

冠132個 (18.2%)、ジャケット冠73個 (10.1%)、
 継続歯 2個 (0.3%)の順であった。さらに前装冠
 においては、陶材溶着鑄造冠が105個 (14.5%)、
 レジン前装冠が27個 (3.7%)で、既製陶歯前装冠
 の使用はみられなかった。また、ジャケット冠に
 ついてはレジンジャケット冠が71個 (9.8%)で、
 ポーセレンジャケット冠はわずかに2個 (0.3%)
 であった。

年齢階級別では、20歳代以下においては一部被

覆冠の装着頻度が高く、30歳代以上では全部鑄造
 冠が高かった。また、前装冠のなかでは、20歳未
 満を除く各年代において、陶材溶着鑄造冠がレジ
 ン前装冠を上回っていた。

性別との関係では、男女とも全部鑄造冠が最も
 多く、また、一部被覆冠を除く他の装着冠では、
 男女の差はわずかであった。

部位別との関係では、前歯部は上顎において陶
 材溶着鑄造冠80個(11.0%)、レジンジャケット冠
 55個 (7.9%)、レジン前装冠の順であった。また
 下顎においてはレジンジャケット冠16個(2.2%)、
 レジン前装冠7個 (1.0%)の順であった。次に小
 臼歯部をみると上下顎とも全部鑄造冠が最も多
 く、次いで一部被覆冠、陶材溶着鑄造冠の順であ
 った。大臼歯部についても上下顎とも全部鑄造冠、
 一部被覆冠の順であった。

6. 支台築造体について

表9、10は支台築造体の種類別築造頻度と部位
 別および装着冠の種類別頻度との関係を表したも
 のである。

全体では、キャストコアが449個 (93.5%)で
 最も多く、以下レジンコア、セメントコア、
 アマルガムコアの順であった。

また、部位別および装着冠の種類別との関係で
 みても、キャストコアが全ての部位および装着
 冠において、大半を占めていた。

考 察

今回の報告は、昭和63年1月から同年12月まで
 の1年間松本歯科大学病院補綴診療科を訪れ
 た外来患者に作製、装着された単独冠について、
 患者総数と地域別患者数、性別と年齢別患者数な
 どを含む4項目について調査したものである。以
 下、今回の調査成績を総括するとともに、昭和62
 年の調査報告⁹⁾と比較した。

A. 患者総数と地域別患者数について

患者総数は410名で、昭和62年の報告と比較し
 て、73名 (15.1%)の減少が見られた。構成率に
 ついては、塩尻市内で2.9%の減少がみられ、また
 塩尻市内を除く長野県内では逆に3.7%の増加が
 みられた。これは塩尻市が歯科医院の増加が認め
 られる地区であるにもかかわらず、塩尻市内の人口
 推移に急激な変化がみられないこと⁹⁾と、大学
 病院補綴診療科としての特殊性によるものであろ

表7：単独冠の種類別および性別装着数

種 類	調査年	性 別		計
		男	女	
全部鑄造冠	昭63	178 (24.6)	173 (23.9)	351 (48.4)
	昭62	164 (17.4)	263 (27.8)	427 (45.2)
前装冠	昭63	66 (9.1)	66 (9.1)	132 (18.2)
	昭62	66 (7.0)	138 (14.6)	204 (21.6)
既製陶歯前装冠	昭63			
レジン前装冠	昭63	14 (1.9)	13 (1.8)	27 (3.7)
	昭62	6 (0.6)	6 (0.6)	12 (1.3)
陶材溶着鑄造冠	昭63	52 (7.2)	53 (7.3)	105 (14.5)
	昭62	60 (6.3)	132 (14.0)	192 (20.3)
ジャケット冠	昭63	35 (4.8)	38 (5.2)	73 (10.1)
	昭62	38 (4.0)	64 (6.8)	102 (10.8)
レジン ジャケット冠	昭63	35 (4.8)	36 (5.0)	71 (9.8)
	昭62	34 (3.6)	55 (5.8)	89 (9.4)
ポーセレン ジャケット冠	昭63		2 (0.3)	2 (0.3)
	昭62	4 (0.4)	9 (1.0)	13 (1.4)
継続歯	昭63	1 (0.1)	1 (0.1)	2 (0.3)
一部被覆冠	昭63	50 (7.9)	117 (16.1)	167 (23.0)
	昭62	83 (8.8)	123 (13.0)	206 (21.8)
計	昭63	330 (45.5)	395 (54.5)	725 (100.0)
	昭62	357 (37.8)	588 (62.2)	945 (100.0)

(%)
 昭63：昭和63年
 昭62：昭和62年

う。

B. 性別および年齢階級別患者数について

男女比については、その差は昭和62年よりも縮まっていたが、構成率で女性が男性を上回っており、これは他の報告^{2-8,10,13)}と同様であった。これは、女性のほうが男性よりも、比較的通院する時間が得やすい環境にあるためと思われる。

年齢階級別患者数をみると、昭和62年と同様に患者総数は減少したが、60歳代では20名(6.4%)

の増加がみられた。これは、人口の高齢化とともに歯の寿命が延びてきたこと¹⁵⁾を反映している。

C. 単独冠について

単独冠装着総数において220個(23.3%)の減少がみられたが、これは患者数の減少と歩を一にしたものと考えられる。

性別装着頻度では、性別患者数の成績と同様に女性のほうが高かった。しかし、男女差は減少した。これは、性別齶蝕罹患率¹⁵⁾と一致している。

表8：単独冠の種類別および部位別装着数

種類	調査年	部位		3+3		54 45		8-6 6-8		8+8		3+3		54 45		8-6 6-8		8+8		8+8	
		3+3	54 45	8-6 6-8	8+8	3+3	54 45	8-6 6-8	8+8	3+3	54 45	8-6 6-8	8+8	3+3	54 45	8-6 6-8	8+8	3+3	54 45	8-6 6-8	8+8
全部铸造冠	昭63	1 (0.1)	60 (8.3)	103 (14.2)	164 (22.6)		77 (10.6)	110 (15.2)	187 (25.8)	351 (48.4)											
	昭62		93 (9.8)	131 (13.9)	224 (23.7)		83 (8.8)	120 (12.7)	203 (21.5)	427 (45.2)											
前装冠	昭63	95 (13.1)	15 (2.1)	2 (0.3)	112 (15.4)	10 (1.5)	6 (0.8)	4 (0.6)	20 (2.8)	132 (18.2)											
	昭62	149 (15.8)	18 (1.9)	4 (0.4)	171 (18.1)	14 (1.5)	9 (1.0)	10 (1.1)	33 (3.5)	204 (21.6)											
既製陶歯前装冠	昭63																				
	昭62																				
レジン前装冠	昭63	15 (2.1)	5 (0.7)		20 (2.8)	7 (1.0)			7 (1.0)	27 (3.7)											
	昭62	8 (0.8)	3 (0.3)		11 (1.2)	1 (0.1)			1 (0.1)	12 (1.3)											
陶材溶着铸造冠	昭63	80 (11.0)	10 (1.4)	2 (0.3)	92 (12.7)	3 (0.4)	6 (0.8)	4 (0.6)	13 (1.8)	105 (14.5)											
	昭62	141 (14.9)	15 (1.6)	4 (0.4)	160 (16.9)	13 (1.4)	9 (1.0)	10 (1.1)	32 (3.4)	192 (20.3)											
ジャケット冠	昭63	57 (7.6)			57 (7.6)	16 (2.2)			16 (2.2)	73 (9.8)											
	昭62	66 (7.0)			66 (7.0)	33 (3.5)	3 (0.3)		36 (3.8)	102 (10.8)											
レジンジャケット冠	昭63	55 (7.9)			55 (7.9)	16 (2.2)			16 (2.2)	71 (10.1)											
	昭62	57 (6.0)			57 (6.0)	29 (3.1)	3 (0.3)		32 (3.4)	89 (9.4)											
ポーセレンジャケット冠	昭63	2 (0.3)			2 (0.3)					2 (0.3)											
	昭62	9 (1.0)			9 (1.0)	4 (0.4)			4 (0.4)	13 (1.4)											
継続歯	昭63	1 (0.1)			1 (0.1)		1 (0.1)		1 (0.1)	2 (0.3)											
	昭62	5 (0.5)			5 (0.5)	1 (0.1)			1 (0.1)	6 (0.6)											
一部被覆冠	昭63	4 (0.6)	22 (3.0)	56 (7.7)	82 (11.3)	8 (1.1)	23 (3.2)	54 (7.4)	85 (11.7)	167 (23.0)											
	昭62	4 (0.4)	54 (5.7)	54 (5.7)	112 (11.9)	17 (1.8)	27 (2.9)	50 (5.3)	94 (9.9)	206 (21.8)											
計	昭63	158 (21.8)	97 (13.4)	161 (22.2)	416 (57.4)	34 (4.7)	107 (14.8)	168 (23.2)	309 (42.6)	725 (100.0)											
	昭62	224 (23.7)	165 (17.5)	189 (20.0)	578 (61.2)	65 (6.9)	122 (12.9)	180 (19.0)	367 (38.8)	945 (100.0)											

()%

昭63：昭和63年

昭62：昭和62年

部位別装着頻度において、顎別では上顎が下顎率¹⁵⁾と同じ傾向である。
 を上回り、歯群別では下顎大白歯部が最も多く、支台歯の生・失活歯別装着頻度では、失活歯支
 下顎前歯部が最も少なかった。これは、齶蝕罹患台のものが全体の70%以上を占めた。これは他の

表9：単独冠支台築造体の種類別および部位別築造数

種類	部位	調査年									
		3+3	5+4/45	8-6 6-8	8+8	3+3	5+4/45	8-6 6-8	8+8	8+8	8+8
キャスト コア	昭63	122 (25.4)	64 (13.3)	76 (15.8)	262 (54.6)	16 (3.3)	75 (15.6)	96 (20.0)	187 (39.0)	449 (93.5)	
	昭62	183 (27.2)	93 (13.8)	95 (14.1)	371 (55.0)	45 (6.7)	72 (10.7)	102 (15.1)	219 (32.5)	590 (87.6)	
アマルガム コア	昭63			3 (0.6)	3 (0.6)			1 (0.2)	1 (0.2)	4 (0.8)	
	昭62			2 (0.3)	2 (0.3)		2 (0.3)	1 (0.1)	3 (0.4)	5 (0.7)	
レジ コア	昭63	4 (0.8)	2 (0.4)	8 (1.7)	14 (2.9)	2 (0.4)	4 (0.8)	2 (0.4)	8 (1.7)	22 (4.6)	
	昭62	12 (1.8)	1 (0.1)	7 (1.0)	20 (3.0)	3 (0.4)	4 (0.6)	13 (1.9)	20 (3.0)	40 (5.9)	
セメント コア	昭63			4 (0.8)	4 (0.8)		1 (0.2)		1 (0.2)	5 (1.0)	
	昭62	5 (0.7)	9 (1.3)	11 (1.6)	25 (3.7)	1 (0.1)	7 (1.0)	6 (0.9)	14 (2.1)	39 (5.8)	
計	昭63	126 (26.3)	66 (13.8)	91 (19.0)	283 (59.0)	18 (3.8)	80 (16.7)	99 (20.6)	197 (41.0)	480 (100.0)	
	昭62	200 (29.7)	103 (15.3)	115 (17.1)	418 (62.0)	49 (7.3)	85 (12.6)	122 (18.1)	256 (38.0)	674 (100.0)	

() %
 昭63：昭和63年
 昭62：昭和62年

表10：単独冠支台築造体の種類別および単独冠の種類別築造数

築造体	単独冠	調査年	種類別築造数									
			全部 鑄造冠	前 装 冠	既 製 前 装 陶 歯 冠	レ ジ ン 前 装 冠	陶 材 鑄 造 着 冠	ジ ャ ケ ット 冠	レ ジ ン ジ ャ ケ ット 冠	ポ リ セ レン ジ ャ ケ ット 冠	継 統 歯	一 部 被 覆 冠
キャスト コア	昭63	285 (59.4)	107 (22.3)		21 (4.4)	86 (17.9)	54 (11.3)	52 (10.8)	2 (0.4)		3 (0.6)	449 (93.5)
	昭62	317 (47.0)	173 (25.7)		11 (1.6)	162 (24.0)	84 (12.5)	78 (11.6)	6 (0.9)		16 (2.4)	590 (87.5)
アマルガム コア	昭63	4 (0.8)										4 (0.8)
	昭62	3 (0.4)									2 (0.3)	5 (0.7)
レジ コア	昭63	16 (3.3)	6 (1.3)		4 (0.8)	2 (0.4)						22 (4.6)
	昭62	23 (3.4)	5 (0.7)			5 (0.7)	10 (1.5)	5 (0.7)	5 (0.7)		2 (0.3)	40 (5.9)
セメント コア	昭63	4 (0.8)									1 (0.2)	5 (1.0)
	昭62	27 (4.0)	4 (0.6)			4 (0.6)	5 (0.7)	4 (0.6)	1 (0.2)		3 (0.4)	39 (5.8)
計	昭63	309 (64.4)	113 (23.5)		25 (5.2)	88 (18.3)	54 (11.3)	52 (10.8)	2 (0.4)		4 (0.8)	480 (100.0)
	昭62	370 (54.9)	182 (27.0)		11 (1.6)	171 (25.4)	99 (14.7)	87 (13.0)	12 (1.8)		23 (3.4)	674 (100.0)

() %
 昭63：昭和63年
 昭62：昭和62年

報告^{1-8,11,12,14})とも同様の傾向であり、歯内療法の発達および歯牙保存の考え方の浸透による影響が大きいと思われる。

種類別装着頻度では、構成率からみると62年度と同様に全部鑄造冠が最も多く、また、一部被覆冠の構成率が増加した。これは残存歯質に対する配慮と患者の審美性に対する要求の高まりがこうした成績になったものと考えられる。

支台築造体では、昭和62年までの報告¹⁻⁸)と同様にキャストコアーが最も高い使用頻度を示した。これは松本歯科大学病院が教育病院としての性格をもっている以上、支台築造法の基本であるキャストコアーの頻度が高いのは容易に理解できるところである。

結 論

松本歯科大学病院補綴診療科に昭和63年1月から同年12月までの1年間に来院した患者および作製、装着された単独冠を中心にその頻度調査を行ない、以下の結果を得た。

1. 患者総数は410名で、地域別患者構成率では、昭和62年と比べて、塩尻市内を除く長野県内の患者が増加し、塩尻市内在住者は減少した。

2. 性別患者構成率では、女性が52.2%を占めた。また、年齢階級別構成率では、20歳代から60歳代までが全体の93.5%を占めた。

3. 単独冠および架工義歯の装着数は、それぞれ725個と207装置であった。

4. 単独冠について

イ) 年齢階級別装着頻度では、30歳代が最も多く、20歳代から60歳代までが全体の94.9%を占めた。

ロ) 部位別装着頻度では、上顎が下顎を上回り、歯群別では下顎大臼歯部が最も多く、下顎前歯部が最も少なかった。

ハ) 支台装置の種類別装着頻度では、全部鑄造冠が48.4%と最も多く、次いで一部被覆冠、陶材溶着鑄造冠であった。

ニ) 支台歯の生・失活歯別装着頻度では、失活歯が72.6%を占めた。

ホ) 支台築造体では、キャストコアーが93.5%を占めた。

5. 昭和62年の報告と比較すると、患者数で73名(15.1%)少なく、単独冠の装着数は220個

(23.3%)の減少がみられた。

その他の項目については、特に大きな傾向の変化は認められなかった。

文 献

- 1) 長田 淳, 三沢京子, 戸祭正英, 伊藤晴久, 岩崎精彦, 石原善和, 大野 稔, 小山 敏, 高橋久美子, 押川卓一郎, 甘利光治 (1985) 昭和49年における冠・架工義歯に関する統計的観察. 松本歯学, 11: 70~83.
- 2) 伊藤晴久, 竹内利之, 戸祭正英, 長田 淳, 三沢京子, 岩崎精彦, 石原善和, 乙黒明彦, 片岡 滋, 高橋喜博, 甘利光治 (1985) 昭和52年における冠・架工義歯に関する統計的観察. 松本歯学, 11: 84~102.
- 3) 平野龍紀, 杉本久美子, 戸祭正英, 石原善和, 伊藤晴久, 岩崎精彦, 乙黒明彦, 大野 稔, 片岡 滋, 大溝隆史, 甘利光治 (1985) 昭和55年における冠・架工義歯に関する統計的観察. 松本歯学, 11: 222~244.
- 4) 杉本久美子, 長田 淳, 石原善和, 伊藤晴久, 岩崎精彦, 三沢京子, 小山 敏, 高橋喜博, 岩根健二, 宮崎晴郎, 甘利光治 (1985) 昭和58年における冠・架工義歯に関する統計的観察. 松本歯学, 11: 245~269.
- 5) 大野 稔, 岩井啓三, 石原善和, 乙黒明彦, 片岡 滋, 岩根健二, 戸祭正英, 甘利光治, 中根 卓, 太田紀雄 (1986) 昭和59年における冠・架工義歯に関する統計的観察 その1. 松本歯学, 12: 355~365.
- 6) 大溝隆史, 竹下義仁, 岩井啓三, 石原善和, 片岡 滋, 高橋喜博, 大島俊昭, 稲生衡樹, 伊藤晴久, 乙黒明彦, 三沢京子, 岩根健二, 甘利光治, 中根 卓 (1988) 昭和60年における冠・架工義歯に関する統計的観察 その1. 松本歯学, 14: 218~227.
- 7) 竹下義仁, 大溝隆史, 岩井啓三, 石原善和, 片岡 滋, 大島俊昭, 稲生衡樹, 小林賢一, 甘利光治, 中根 卓 (1988) 昭和61年における冠・架工義歯に関する統計的観察 その1. 松本歯学, 14: 306~315.
- 8) 稲生衡樹, 森岡芳樹, 片岡 滋, 宮崎晴朗, 大島俊昭, 小林賢一, 岩井啓三, 石原善和, 甘利光治, 中根 卓 (1989) 昭和62年における冠・架工義歯に関する統計的観察 その1. 松本歯学, 15: 288~296.
- 9) 長野県総務部情報統計課編 (1989) 昭和62年長野県統計書. 長野県統計協会, 長野県.
- 10) 河原邑安, 谷口 勉, 藤本正之, 森 勝利, 藤田茂信, 今上茂樹, 山本萬里子, 村山茂樹 (1977) 大阪歯科大学臨床歯科学研究所付属診療所における最近5年間における補綴物の統計的観察 その

1. 各種補綴物の装着頻度について, 歯科医学, 40: 916~922.
- 11) 小森富夫, 甘利光治, 阪本義典, 久保一慶, 里見雅輝, 藤多文雄, 沢村直明, 小沢 寛, 田中昌博, 斎藤高子 (1980) 昭和53年における冠・架工義歯補綴に関する統計的観察 その1. 単独補綴歯冠. 歯科医学, 43: 268~276.
- 12) 川添亮彬, 大塚 潔, 山下秀介, 村田洋一, 井田治彦, 山下錦之助, 末瀬一彦, 坂井田藤芳 (1985) 昭和58年における冠・架工義歯補綴に関する統計的観察 その1. 単独補綴歯冠. 歯科医学, 48: 691~698.
- 13) 中嶋 武, 小林琢三, 山田芳夫, 吉田 忠 (1977) 各種補綴物の10年間の統計(I). 岩医大歯誌, 2: 22~28.
- 14) 天野秀雄, 沼倉則正, 高橋美好, 秋山 修, 榎本 功, 荻野悦志, 小沢英世, 田端義雄, 柳田正浩, 山中大和, 前田睦夫 (1977) 冠, 架工義歯の統計的観察. 城西大紀要, 6: 247~254.
- 15) 厚生省健康政策局歯科衛生課編 (1989) 昭和62年 歯科疾患実態調査報告. 口腔保険協会, 東京.